

NHK金沢放送局長賞

障がいがあったからこそ

加賀市立錦城中学校三年

福嶋 開人

僕は、生まれつき病気があります。病名は「先天性左腓骨裂欠損」です。僕の左足は、生まれつき短いです。

そこで、足を延ばすために、「骨延長手術」という手術を受ける事になりました。三年生の夏休みから四年生の二学期初めまでと、五年生の冬休みから六年生の三学期中頃まで二回受けました。当時の小学校の友達と別れる時はとても悲しかったです。手術後の三年生の時は石川整肢学園へ入園し、石川県立平和町養護学校に転校しました。また、五年生の時は、石川県立総合養護学校に転校しました。当時は常に、松葉杖か車いすでした。初めは、どこに行っても楽しくないと思っていましたが、学園や学校で様々な人と出会い、転校してよかったと思えるようになりました。そこには、車いすでもバスケットボールやテニスを楽しんでいたり、重い病気を持っていても、明るく周りを元気にしてくれる人達がいて、障がいを持っていても、普通の人と変わらないと感じました。そして、車いすバスケットなどを通して、僕は車いすや松葉杖での生活が楽しいと思うようになりました。しかし、やはり外に出ると大変だと思ったり、つらいと思う事がありました。

車いすで大変だと思った事は道路がガタガタだったり、土や砂で動けなくなったりした事です。松葉杖の時に困った事は、すべる床でした。

しかし、一番僕がつらく大変だった事は、周りの人の目でした。左足がただ短いだけですごく特別扱いされる事があります。僕が特別扱いされている事に、良いと思う人もいれば良いと思わない人もいます。四年生の時、愛知県で電車に乗った事がありました。乗る駅で、駅員さんに、「どこで降りますか？」と聞かれ、予定の駅名を伝えると、その駅や乗り換えの駅では、数人の駅員さんが僕のために待機して下さっていました。そして、車いす用のスロープを渡して下さったり、階段で持ち上げて下さったりしたのです。その親切がとてもうれしく思いました。しかし、電車の中には好奇の目で見てくる人もいました。ある人には、「あの人の足おかしくない？」と言われました。小さな子どもは仕方ないと思いましたが、大人もつられて言っていた事にとっても傷つきました。周りの人に僕は好きで目をひいたわけではなかったのに、もっと気持ちをわかって欲しかったです。僕は、自分の足の事を、気にしていたので、その一言を聞いてとても悲しく悔しい思いをしました。

僕は、手術の前はほとんど自分から何かをするという事はありませんでしたが、親元を離れ金沢で生活していくうちに、先生や友達から僕にしかできない事を教えてもらいまし

た。それは、車いすの子を押してあげたり、勉強を教えてあげたりする事でした。自分も車いすを使った経験があるので、危険な所や通りづらい所などよくわかります。そこで、そういう事に気を配りながら車いすを押してあげました。また、下級生には勉強を教えてあげる事もできました。こういう事は、周りの人達から「こうしてあげたら」と後押しをされたからできた事です。

養護学校では、児童生徒会に入り、高等部や中学部の人達といっしょに仕事をし、今までできなかった事も経験する事ができました。学園では自分より小さい子の世話をしたり、医師や看護師、理学療法士など様々な立場の人と話す事によって、たくさんの事を学びました。今の自分に足りないものは何かを考え、これからの自分に必要な物を見いだす事ができたと思います。そして、もっと周りの人に気を配る事、自分の思っている事を口に出して言う事が必要だと気付きました。

障がいがあったからこそ、こんなにたくさんの人と出会う事ができました。そして、その人達との出会いがあったから昔より積極的に行動できるようになったのだと思います。今、僕は中学校で、生徒会執行部として活動しています。また、障がいがあったからこそ、他の人ではわからない社会の不便さや言葉の重みについて気付く事ができました。

僕には夢があります。それは、どんなものでも開発してしまう技術者です。技術者は、多くの人に役立つものを作っていきます。障がいも悪い事がたくさんありましたが、プラスの方が多かったと思います。だからこそ、障がいがあって良かったと今は思えます。